

2016 年春学期レポート
日本財団聴覚障害者海外奨学金事業
第 10 期生留学奨学生
山本綾乃

Gallaudet University
M.A. Deaf Education Special Program

ギャロデット大学大学院へ進学し早くも一年が経過、最近では日々の講義や課題にも慣れてきました。本大学院教育学部は、日本の大学院のような修士論文のための調査・研究というより、基礎的な教育指導法やろうの歴史などを学び、長期的な教育実習を通して実践的な指導法を身につけることを目的とした、まさに現場に強い教職員を育てるための大学院であり、自分にとって最適な環境だと改めて実感しています。

ギャロデット大学の新しい学長に **Roberta J. Cordano** 氏が就任されました。初めはろう者女性学長、LGBT 当事者です。彼女は数多くのマイノリティー要素を持つ存在であるため、学生の良き理解者であり距離が近く、学生主催のイベントにも積極的に顔を出してくださいます。ギャロデット大学のさらなる発展が楽しみです。

○学習面

今学期は四つの講義を履修しました。全て大学院の学位を取るために必要な講義でした。

【EDU670-01: Spring2016-EDU670-01 Teaching Students with Disabilities】

障害児教育総論。様々な障害種の名前や特徴、支援方法について学びました。日本での学部生時代に障害児教育を専攻していたので基礎的な知識はあり、このクラスでは今までの復習という形で知識や支援方法の再確認をすることができました。また英語での障害名の表記法や新しい障害種なども学ぶことができました。

【EDU713-01: Spring2016-EDU713-01 Language Acquisition and Cognitive Development】

言語獲得の講義。教育学部長 **Maribel** 教授のもと学びました。教授の話し方や手話はメリハリがあり、とても分かりやすかったです。留学生にも理解があり、その都度それぞれの国の状況にも関心を持ってくださいました。

人間の脳は 3 歳児で、すでに大人と同じ仕組みになるそうです。そのため言語獲得はやはり早い時期に行う必要があります。英語とアメリカ手話両方を同時に習得することでの混乱はなく、逆にバイリンガル教育を積極的に行うことが必要だそうです。何よりも家族の支援は欠かせません。豊かなコミュニケーションを行う一例として、ご飯の時間や絵本の読み聞かせが挙げられます。日常の小さな繰り返しを大切にして、言葉を育てる必要があると学びました。最終課題は、ある会議に招待されバイリンガル教育について講演することを想定したものでし

た。今までの講義で学んだことを5つ以上レポートにまとめ、パワーポイントを作成しました。通常レポートは書き言葉で書くのですが、今回は話し言葉で書き上げたので新鮮でした。会議での講演者としての招待状もあり、モチベーションが上がりました。

【EDU719-01: Spring2016-EDU719-01 K-12 Classroom-Based Assessment】

評価法の講義です。評価と言えば、生徒の学習態度や成績などを評価した「通知表」を想像される方が多いと思います。それはもちろん大切ですが、指導する側の教員自身を評価することも重要であることを学びました。児童の学習の変化を評価する練習として、メリーランドろう学校幼稚部の教育実習を通して、ある児童の課題を評価しました。私が着目した内容は、アメリカ手話の表現力です。三段階に分けて、速さ・明瞭・表情の三つのカテゴリーから評価しました。対象児は、毎日練習を繰り返し、一回目に比べ、三回目は円滑に表現できるようになっていました。忙しい現場の中でも、児童生徒の学習の様子をこまめに評価することが、自分の指導方法を見直し、効果的な教育を行うために必要なことであると認識しました。

【EDU789-01: Spring2016-EDU789-01 Practicum II and Seminar: Deaf Education】

高度なろう教育を誇るメリーランド州立ろう学校の幼稚部で、5週間の教育実習を経験させていただきました。自分の本来の専門は小学部ですが、質の高い幼稚部のろう教育は小学部にも応用できる内容が随所にありました。幼児期から英語とアメリカ手話のバイリンガル教育が積極的に取り入れられており、例えば読み書きのクラスでは、学校に変えて欲しいことをテーマに絵と文章を書き、手話で発表していました。学校に花が足りないのもっと植えて欲しい。劇のクラスが欲しい。給食の量をもっと増やして欲しい。など活発な意見が出されていました。これを一冊の本にまとめアメリカ手話の練習をして、みんなの前で発表。自信のない児童もいましたが、先生の心強い支えで発表を終えた瞬間、生き生きとした表情に変わっていたのは印象的でした。

幼稚部はほぼ毎日同じ日課です。一日の流れは、登校、朝の会、英語の読み書き、体育、アメリカ手話、お昼、算数・理科、帰りの会となっています。子ども達はそれを正確に把握しており、自主的に活動していました。

担任の先生は教室をデコレーションすることが好きな方で、教室作りの参考にもなりました。

○生活面

春休みには第7期生の中川美幸さんと共に、カリフォルニアで開催された二つの早期ろう教育会議に参加しました。一つ目は、サンディエゴで開かれたEHDI (EARLY HEARING DETECTION & INTERVENTION MEETING)、もう一つはフリーモント市で開かれたECE サミット (Early Childhood Education Summit) でした。

前者は主に言語聴覚士を目指す学生に向けた会議であり、手話の大切さを伝える分科会もありましたが、どちらかと言えば聴覚口話法やキュードスピーチの活

用に関する分科会が多かったように感じました。最も印象に残ったことは、ろう児のリズムと言語獲得についての内容です。リズムを通して、単語とアメリカ手話を繰り返し唱え、楽しみながら学習していくという実践です。映像もありますのでご覧ください。(https://youtu.be/xlmtna_gv-Q)

後者は全米の教職員関係者が集う、最先端のろう教育についての会議でした。手話アートや人形を使ったお話、個性的な教室などどれも印象的でした。ろうアイデンティティの育成につながる授業や教材作りは、日本のろう学校の授業にも大変参考になりました。

両者ともに、主に早期教育の支援方法の内容・報告でしたが、小学部教育にも生かせる貴重な情報を得ることができました。

フリーモント滞在中には、昨年一年間お世話になったオーロニ大学にお邪魔し、恩師のナンシー教授や元クラスメイトとの再会を果たすことができました。さらにホームステイでお世話になったアリス家に数日間滞在させていただき、近況報告をし合いました。改めて人のつながりの大切さを感じました。

さて話は変わりますが、2016年秋学期から、ギャロデット大学内にあるケンダルろう学校の放課後プログラムのスタッフとしてお仕事をさせていただけることとなりました。アメリカのろうの子どもたちと直にふれあえる機会を頂くことができ、嬉しく思います。修士論文の集筆も始まるので、さらに気を引き締めて頑張っていきます。